立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院学生研究
２０１８年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院　文学　研究科　日本文学　専攻			
研究代表者（2019年3月現在のものを記入）	在籍課程・学年・学生番号	氏　名		
	□博士前期課程　年 □博士後期課程４年・15PG007E	仲井眞　建一　印		
指導教員	所属・職名	氏　名		
	文学部・教授	石川　巧　印		
自然・人文・社会の別	自然　・　人文　・　社会	**個人・共同の別**	個人　・　共同　名	
研究課題	死者の物語化および政治化――記憶継承の表現			
研究組織（研究代表者・共同研究者）※2019年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年	氏　名		
	文学研究科・日本文学専攻・博士課程後期課程・四年	仲井眞　建一		
研究期間	２０１８　年度			
研究経費（1円単位）	（支出金額）　30,401 円　／（採択金額）　200,000 円			

研究の概要（200～300字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

目取真俊「面影と連れて」と又吉栄喜「巡査の首」を研究では扱った。それぞれ死者の記憶、生者の弔い、をイメージすることをキーワードに読み解いた。「面影と連れて」では不可避的に暴力の可能性を呼び込む身体と〈聴く〉態度が今ここにない不在の他者を受容するために必要であると論じる。〈聴く〉ことに頼ってしか示すことのできない死者のイメージを立ち上げると結論する。「巡査の首」には文化の問題が提起されているが、テクストはそうした項に回収されない。しかし普遍の名の元に他者であるはずの「民族」、アイデンティティ、文化が否定されていったことをもテクストは見逃さない。その上でどのように弔うか。ということを研究した。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　死者の記憶　〕〔　弔いの語り　〕〔　イメージすること　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

①目取真俊「面影と連れて」

目取真俊「面影と連れて」について、〈呼びかけ〉と〈聴く〉という態度に注目して論じた。まず目取真俊個人の言説、および同時代評、先行研究からテクストの位置づけを確認した。「沖縄」文学における言説の傾向と、そこに不可分にからみあう政治的言説空間を明らかにした。

テクストが舞台とするのは１９７０年代の沖縄県の北部地域である。１９７０年の沖縄とは、占領から、本土復帰へと至る復帰運動が盛んであった。さらにテクストにも書き込まれている本土復帰および本土復帰を記念するイベント、海洋博が開催されている。一九六八年に発表された本土復帰は、基地を残したままの復帰であるという点で禍根を残し、人々を復帰派、独立派など様々に分断した。しかし軍事基地を争点とする議論は次第に影を潜め、経済的な側面が強調されるようになったことで大勢は一九七二年の本土復帰へと傾いていった。その復帰事業の目玉が、一九七五年に予定された海洋博である。大阪万博を模した海洋博は開発の起爆剤として多様な公共事業を計画し、〝本土並みの経済〟という旗印のもと、沖縄につかの間の好景気をもたらした。農家は土地を売り土建業者の下請けとなり、農協資金や特別融資制度を利用した観光客用の旅館・民宿ラッシュがおこった。本土の大手ホテルの進出も急増し、海洋博には名誉総裁として皇太子が来沖するなど、経済とナショナリズムとが複雑にからみ合った本土との一体化イベントが焦点を結んでいった。そうした経済とナショナリズムとが複雑にからみ合った状況に対して「ひめゆりの塔事件」、――ひめゆりの塔に参拝している皇太子夫妻に過激派が火炎瓶を投げつけるという事件が起きる。別名火炎瓶事件とも呼ばれるこうした出来事は一挙に、過剰に「大和」と一体化を志向する意識を露にした。岡本恵徳が「沖縄の「戦後民主主義の再検討」」（『新沖縄文学』第一九号　沖縄タイムス社　一九七一年三月）に、復帰運動の問題点として指摘していた、たとえ「沖縄人」というカテゴリーを強固に持ちえても、たやすく「大和」というカテゴリーに統合し、過度な同化、皇民化教育を推し進めるだろうという事態が生じたのだ。テクストに描き込まれたこれらの事件によって呼び起こされたナショナリズムは、語り手「うち」の身体を複雑に絡めとろうとする。いじめによって義務教育をまともに受けることのできなかった「うち」は、復帰運動（教師たちも中心だった）のことを全く語らない。そもそも国家という単位を認めず、「うち」の身体で把握した状況でしか、関係を認めない。テクスト中で「うち」は、「ひめゆりの塔」事件にかかわったとされ、取り調べを受ける。「沖縄の人」「沖縄人」という呼びかけに対し、「うち」は黙秘し、抵抗する。「沖縄の人」「沖縄人」が「また差別されるさ」という警察には、内心で「うちは小さい時からずっと哀れしてきたし、差別されてきた」と反論。警察は「沖縄」人と最初から前提した上で、「うち」を取り調べていくのだが、そうした警察に対して、身体感覚で抵抗することで、政治的な言説がいかに個人に対して暴力的に働くかということがテクストには明らかになっている。ここで本論はテクストの〈呼びかけ〉と、それに対して〈聴く〉という態度に注目して考察を進めた。そのために、まず不可避的に暴力の可能性を呼び込む身体を、取り調べで争点となる写真と相似的な関係にあるものとし、施される解釈を問題化した。取り調べの際、警察は「うち」の思い出の写真を証拠写真と解釈し、それに当てはめるように悪意を読み込んでいく。それに対し「うち」は思い出を基点に解釈を展開し、警察の解釈と対峙する。写真がある鋳型にはめ込まれたように、語り手の「うち」にも様々な対象を鋳型に嵌め込むような暴力が作動する。

そうした暴力の一方で相手を〈聴く〉態度が今ここにない不在の他者を受容する行為であると論じた。一見受動的である、それが、〈語り〉を招き入れるきっかけとなり、他者が現れる要件となる。以上を踏まえた上で、〈聴く〉相手を必然的に要求する「うち」の〈語り〉が、〈聴く〉ことに頼ってしか示すことのできない「面影」、死者たちのイメージを立ち上げると結論した。

研究成果の概要　つづき
②又吉栄喜「巡査の首」

テクストが主題とするのは「裏切り者」の弔いである。戦中、(台湾がモデルと思われる)「垂下島」で巡査をしていた功一朗が同胞殺しの疑いをかけられ、戦後にその家族が、舞台である謝名本島の住民から差別される。功一朗の有罪性の象徴として住民たちは、その遺体に首がないことをいう。垂下島の原住民・阿族に首を狩られたのだ。ここで注目しなければならないのは、功一郎が裏切り者とされることによって、島内の戦中の死者はすべて無垢な死者となることである。つまり罪を犯した功一朗一人が島から弔いを拒否されることによって、代わりに他の死者たちは罪の訴求を逃れ、住民たちは安心して無垢な死者を弔うことができるという構図になっているのだ。そうした状況に対して、功一朗の家族、妻・タキとその孫・克馬と早紀が弔いを試みる。物語はタキが死に、その遺言にしたがって、克馬と早紀が垂下島に向かうところから駆動する。まず又吉栄喜が提示する「民族」の問題を確認したうえで登場人物、死者と自分を緊密な関係（因果）で把握しようとする克馬と、死者に自分を「所有」させる／する早紀とを確認した。克馬の議論は死者と自分とを強く結びつけるために、戦中功一朗が行ったことをすべて正当化しようという欲望のもとに組み立てられている。テクストの発表は２００２年であるが、議論は現在の歴史修正主義に通ずるものがあり、そうした問題意識をテクストは戦争の加害者をどのように弔うかといった問題系の元に先取りしていた。克馬はほとんど戦中の大東亜共栄圏イデオロギーと変らない言説の元に垂下島の他者と同化、他者を所有しようと試みるのだ。一方、妹の早紀はまったく逆のベクトルを持つ。早紀は自らを絶対化することはなく、夢の世界の流動的な身体のままに、他者に明け渡す。早紀は他者を所有する／される。そうした早紀の態度が、タキと功一郎という死者の思いを呼び出すのだが、しかしこれも克馬とパラレルな態度である。つまり克馬は他者を完全に所有することで、他者を認めず、逆に早紀は他者に所有されることで、他者を認めない。いずれにせよ他者と自分とを同質化することによって他者として他者が対峙することを認めないのだ。早紀は同化を極限にすすめることによって、遂には、功一朗の妻であるタキの場所を奪ってしまいかねない場所にまで至る。死者は実体的に把持することができない他者であるから、克馬も早紀もイメージすることで、捉えようとする。しかし功一郎とタキという死者のあやふやさ、あるいは具体性が、兄妹のイメージに歪みを生じさせていく。そうした歪みを基点に、功一朗の首を狩った部族長や妻・タキの提示する弔いがある。部族長は戦争という単位においても常に一人一人の殺害を殺人として認識する。ここにいかなイデオロギーにも正当化されない殺人を認識することで、ひるがえって功一朗個人を認識する部族長の態度があらわれるのだ。こうした構図は妻であるタキにも共有されている。つまり戦争という状況下、巡査という職業、また歴史全体から導き出されるイメージにではなく、功一朗という愛する人の弔いを試みるのだ。このときあくまで個人の弔いを志向する二人は墓、ひいては係累を巻きこむ追悼の儀式を拒否する。二人が志向するのは死者と生者の世界の断絶であった。ひるがえってこのとき克馬と早紀にも弔いのためのイメージが獲得される。謝名元島の住民も、功一郎に裏切り者のイメージを付与し続けることで、自らの死者を無垢にし、弔いのイメージをようやく獲得したのだが、そこには死者を一様に表象する平板さがあり、またこうした弔いは失敗にさらされる。ここで克馬は仮に功一郎が「裏切り者」だとしても、弔うことができる。タキと功一郎の二人を「二人きり」にし所有にも因果にも至らない。しかし、『巡査の首』は個を安易にうたうのではない。テクストにはそうした暴力性が描かれ、「民族」、アイデンティティ、文化が単に否定されるだけのものではないことが記されている。普遍の名の元に他者であるはずの「民族」、アイデンティティ、文化が否定されていったことをテクストは見逃さない。その上で愛するものをどのように弔うか、といったことが描かれている。

以上を本研究では明らかにした。

研究発表（研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

① 雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
仲井眞建一、「目取真俊「面影と連れて」論――「光」の記憶を聴く」、『日本近代文学』、１００集、２０１９年５月ごろ掲載予定

④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）
スタッフとして参加、「越境広場」５号批評会、３月１０日、東京外国語大学